月刊『英語教育』連載 Question Box より

イギリス発音の/ɒ/の記号について

南條健助

Q. 『ジーニアス英和辞典』（第 5 版）（G5）の発音記号についてお尋ねします。イギリス発音では，従来の/ɔ/の記号の代わりに新しく/ɒ/という記号が使用されています。この記号は英英辞典では見られますが，私の知る範囲では日本の辞書では見たことがありません。G5がこの記号を使用するようになった理由を教えて下さい。これは/ɔ/の発音が変化したからでしょうか。/ɔ/と/ɒ/の違いを教えて下さい。　（東京都　H. I.）

Ans. 標準英国発音（英音）における lot や top の母音の表記に/ɒ/という記号を採用したのは，日本の英和辞典としては G5が初めてです。そのため，この記号の使用について同様の疑問をお持ちの読者も多くおられることでしょう。有益なご質問をお寄せいただき，ありがとうございます。

G5で/ɔ/の記号を/ɒ/に変更した理由ですが，/ɔ/の発音が変化したからではありません。また，発音表記を精密化しようとしたわけでもありません。今回の変更は，牧野（2006）がいみじくも批判している日本独特の発音表記方式の不備を是正することが第一義的な理由でした。同時に，/ɔ/の記号が長年学習者に与えてきた誤解を解消するためにも変更が必要でした。

まず，音声事実を確認しておきましょう。従来，日本の英和辞典では，law や talk の母音は/ɔ:/と表記され，lot や top の英音の母音は/ɔ/と表記されてきました。前者は長母音，後者は短母音ですが，両者は単に長さが異なるだけでなく，音質そのものが違います。英音における長母音の/ɔ:/は，日本語の「オー」に近い母音ですが，唇はかなり強く丸められます。一方，短母音の/ɔ/は，日本語の「オ」よりも口の開きが大きく，唇の丸めも弱いため，むしろ日本語の「オ」と「ア」の中間くらいの響きになります。詳しくは，小川（2009：5，17）および竹林・斎藤（2008：26，34–35）をご参照ください。

さて，日本のほとんどの英和辞典は，大正時代以来，長年にわたって音量表記（quantitative transcription）あるいはジョーンズ式（Jonesian system）と呼ばれる発音表記方式を採用してきました（『ジーニアス英和辞典』の発音表記も，G3（2001）までこの方式でした）。この方式では，beat と bit の母音は，それぞれ/i:/と/i/のように，pool と pull の母音は，それぞれ/u:/と/u/のように表記されます。すなわち，音質の違う母音にあえて同じ記号を用い，長さ（音量）の違いのみを明示する方式です。

それに対し，ここ10年程の間に新たに出版（または改訂）された英和辞典の多くが採用しているのが，音質の違いと長さの違いの両方を明示する音質音量表記（qualitative-quantitative transcription）あるいはギムソン式（Gimsonian system）と呼ばれる方式です（『ジーニアス英和辞典』も G4（2006）から採用しています）。この方式では，異なった音質の母音は異なった記号で表記されますので，beat と bit の母音は，それぞれ/i:/と/ɪ/のように，pool と pull の母音は，それぞれ/u:/と/ʊ/（または/ʊ/）のように表記されます。今日では，英国で出版されている全ての英語発音辞典と学習英英辞典，および主要な一般英英辞典がこ

の方式を採用しており，英音の発音表記における事実上の世界標準となっています。

上述のように，英音において，音質の違うlawやtalkの母音とlotやtopの母音を，あえて同じ記号を用いて，それぞれ/ɔ:/と/ɔ/のように表記するのは音量表記です。それに対し，音質音量表記を世界的に普及させ，定着させた英国の音声学者A. C. Gimson（1917–1985）は，その著書（1962）において，lotやtopの短母音を/ɒ/の記号で表記し，lawやtalkの長母音/ɔ:/と区別しました。

音量表記は，使用する記号の数が少ないため，一見，学習者の負担は軽減されるように思われます。しかし，いかなる発音表記にも必ず規約（convention）が伴います（枡矢1976：102–103）。音量表記は，/i:，u:，ɔ:/と/i，u，ɔ/のように，表記上は音質の違いを明示しませんが，その前提として「同じ記号であっても，長母音と短母音では音質が異なる」という規約が存在します。このような規約は，学習者にとって分かりにくいばかりでなく，そもそも知られていないというのが現状でしょう。長年，音量表記が「/ɔ:/と/ɔ/は長さが違うだけで音質は同じである」という誤解を学習者に与えてきたことは否めません。なお，/ɔ:/と/ɔ/を含め，英語の母音の発音表記に関する問題点を整理し，優れた改善案を提示している論文に小林（2009）があります。

このような音量表記の問題は，本来は，音質音量表記に変更することによって解決されるはずでした。しかし，日本の英和辞典の場合，音量表記から音質音量表記への移行が，なぜか中途半端になされたため，/ɪ/と/ʊ/（または/ʊ/）の記号は採用されたものの，/ɒ/の記号は採用されませんでした。その結果，/ɔ:/と/ɔ/の区別は音量表記のまま放置され，音質音量表記の中に音量表記が混在した状態になっていました。牧野（2006）は，「/ɪ，ʊ/を採用している英和辞典は全てこの状態にあ」ると述べ，このような表記方式の不備を批判しています。「従来のJones式の方がまだ一貫性があった」との指摘は，全くその通りだと思います。音質音量表記を採用していながら，/ɔ:/と/ɔ/という表記を残したままでは，かえって「/ɔ:/と/ɔ/の音質は同じである」という誤解にお墨付きを与えるようなものでした。音質音量表記では，異なった音質の母音であれば，異なった記号で表記されるはずだからです。このような木に竹を接いだような表記方式は，海外では見られない日本独特の方式です。

Gimson（1962）から半世紀以上経ってしまいましたが，遅れ馳せながらG5が/ɒ/の記号を採用したことで，母音の発音表記に関する理論的な問題も教育的な問題も，ようやく解決されたと考えています。以上，ご参考になれば幸いです。

◆引用文献

Gimson, A. C.（1962）An Introduction to the Pronunciation of English. London: Edward Arnold.
小林篤志（2009）「英語の後舌低母音の発音表記に関する改善案――外国語教育の視点から」『女子美術大学研究紀要』第39号，pp.71–85.
牧野武彦（2006）「学習用英和辞典にイギリス発音の表記は必要か？」https://phoneticsofenglish.wordpress.com/2006/11/
小川直樹（2009）『イギリス英語でしゃべりたい！――UK発音パーフェクトガイド』研究社.
竹林　滋・斎藤弘子（2008）『新装版　英語音声学入門大修館書店.
枡矢好弘（1976）『英語音声学』こびあん書房.

（なんじょう　けんすけ・桃山学院大学国際教養学部准教授）

※『英語教育』2015年7月号から転載。

■ Question Box 質問募集■

質問は随時募集しています。郵便かEメールでお送りください。内容は発音・文法・語法など英語に関するものなら何でも結構です。初歩的な疑問や「生徒にどう説明すべきか」といった指導方法に関する質問も歓迎いたします。

＊宛先：〒113-8541　文京区湯島2-1-1　大修館書店『英語教育』QB係。Eメールの場合は件名を必ず「QB質問」としてください。email：eigokyoiku@taishukan.co.jp
＊質問の引用文には著者名・書名・出版社・出版年・引用頁を示し，該当頁のコピーを添えてください。
＊なお，採用の場合，当該記事は小誌の紙版・電子版両方に掲載させていただきます。予めご了承ください。
＊お寄せいただいた質問の採用諾否についてのお問い合わせは，申し訳ありませんが，ご遠慮ください。